

# 蜀の古道

成都から秦嶺山脈を越えて関中へ

## 紀元前から続く古栈道

蜀道、その歴史は古代ローマの道よりも古く、紀元前300年前後の秦漢時代まで遡ります。東洋と西洋を結ぶ古代シルクロード、中国の北部と南部を結ぶ大運河とともに重要な道と位置付けられており、1950年代に自動車道が開通するまで実際に使われていました。時とともにその姿は失われつつあるものの、現在も当時の石畳の道や、崖面を穿って造られた栈道が残ります。

蜀道は、蜀のある四川盆地と関中（西安）のある渭水盆地を隔てる峻険な山岳地帯に造られた道。多くの枝道がありましたが、主だったルートとして、秦嶺山脈を越え関中と漢中を結ぶ「褒斜道」「子午道」「陳倉道」「儼駱道」、大巴山脈、米倉山を越え漢中と四川を結ぶ「金牛道」「米倉道」、剣閣を迂回し天水と四川を結ぶ「陰平道」「祁山道」などがあげられます。

中でも、李白が「蜀道の難は、青天に上るよりも難し」と詠んだことで有名な難所は「金牛道」の垂直に切り立った岩肌に取り付く栈道「明月峡古栈道」として知られています。また、同じ「金牛道」に残る柏並木の古道「翠雲廊」は、世界的にも珍しい樹齢2000年にもおよび植樹された街路樹が残る道です。

## 張飛が植えた柏の木

かつて、金牛道の梓潼から関中にかけて全長約150キロの区間には、10万本を超える柏の木が茂っていました。自然災害や、文明の発達による伐採、道路工事などで現在はおよそ8000本が残るのみですが、翡翠のような緑色の世界が続く壮大な景観を形容して「翠雲廊」と名付けられ、保存されています。

三国時代、蜀の大將軍・張飛は巴西太守としてここ関中を拠点としていました。行軍の際、夏の暑さで病に倒れる兵士が絶えないことに頭を痛めた張飛は、日差しを遮るために大量の柏の木をこの道沿いに植えました。言い伝えによると、「午前中に木を植えると、午後には日陰をつくり涼をとった」とされており、驚異的な速さで植樹されたことが窺われます。

張飛が植えた柏の木は「張飛柏」と呼ばれ、現在はおおよそ樹齢1800年となっています。直径2メートルほどの木が当時植えられた木である可能性が高いとされており、それとされる巨木を探すのも、この地を訪れた際の楽しみのひとつです。研究者によると、この大規模な柏の木の植林は歴代の皇帝の命により、秦から明の時代にわたって6回行われたとされています。



翠雲廊に立つ張飛像

## 翠雲廊の植林史

翠雲廊は張飛が植えた柏の木をはじめ、紀元前200年代の秦の時代より、大規模な植樹が6回行われたといわれている。

- 第1回：秦の始皇帝による最初の植樹。現在まで残る木は樹齢2000年を超える。
- 第2回：三国時代の張飛による植樹。
- 第3回：晋の時代。現在、高さ18メートルほどの木はこの時代のものとされる。
- 第4回：唐の時代。修復と造林。楊貴妃が好んだ荔枝（ライチ）を運ぶのに利用。
- 第5回：宋の時代。広元から成都にかけて、全体的な造林。
- 第6回：明の時代。剣閣の県長により植樹。

写真／古い石畳と柏並木が続く金牛道

### 二千年来の旧道はいばらの道

中国、四川省には蜀の時代の道が残っているといひます。何もなかったところに舗装道路ができ、ビルが立ち並びそして突然「町」が現れるという急激な変化を続ける現代中国。いまだそのような道が残っているとは俄に信じ難く、疑いを拭いきれぬまま現地へと赴きました。

2019年春、成都から車で走ること4時間、途中、蜀の古道の最後の関所となる白馬関を通り、昭化古城へと向かいます。いくつかある旧道への入口のうち「古驛道」という石碑のある地点より古道歩きをスタート。最初は数段の階段、すぐに尾根に出ることができ、眼下に昭化の町、嘉陵江が広がります。菜の花畑の黄色が美しく、尾根道は視界が利いて明るく、危険な箇所もありません。



いばらをかき分け進む

しかしながら、そのまま峠を過ぎしばらく歩くと様子が変わってきます。踏み跡が辛うじて残る道を草に覆われた石畳を探しながら進みます。季節を間違え夏に来てしまったならば、腰まである草の海をかき分け進むのはめになったことでしょう。ところがやがて道が見えなくなり、とげのある植物が生い茂りはじめます。水が流れた後の沢を直下し、さらに再び直登。垂直移動をして水平の方向に続く旧道を探すも手掛かりはまるでなし。この間、とげが引っ掛かって衣類は破れ、帽子にまで穴が開く始末。月日の流れとともに石畳は雨で流れた土に埋もれ、さらにその上を草が覆っているのです。その後、2時間かけてようやく旧道を見つけ、先へと進むことができました。

「失われゆく、消えゆく道」という現実を身をもって感じることで貴重な経験ですが、危険も多くありました。ツアーでは、静かにのんびりと歩ける箇所を選んで、ご案内したいと思います。



眼下に広がる菜の花畑と昭化の町(3月)

### 関連ツアーのご紹介

成都から秦嶺山脈を越えて陝西省へと続く道

#### 蜀道を歩く 蜀棧道とコノテガシワの並木道

東京発着 | 8日間

出発日：2019年10/26、11/2 発

2020年3/7、3/21、3/28、4/11 発

料 金：278,000円

■最少催行人員：8名(15名様限定)＜添乗員同行＞

■燃油サーチャージの目安：7,000円(7/31現在)

■一人部屋追加代金：38,000円

別冊パンフレット「蜀道を歩く」に掲載



### 難攻不落の剣門関

現在の翠雲廊から金牛道を北上すると現れるのが剣門関です。歴代の攻防戦が繰り返されてきた天然の要塞であり、「剣門関を得れば、四川を得る」とまでいわれた険峻な地です。

三国時代には諸葛孔明が関楼の下に広がる谷に15キロに及ぶ閣道を造り、北伐の本拠地としました。剣門関から見ると両側は切り立った断崖絶壁が迫り、剣門関のある谷間が唯一の道だということがわかります。「鳥道」「石筍峰」「天梯橋棧道」など、関を守るために蜀道から派生した道も残っています。

### 姜維の軍勢も食した「剣門豆腐」

剣門の町・剣門関には豆腐料理店が並んでいます。剣門山区の大豆「黄豆」と周辺72峰の湧き水「剣水」で作った豆腐は、1800年近く前の三国時代から食されてきたと伝えられており、蜀の大將軍・姜維に献上したともいわれる名物の豆腐です。味は繊細でみずみずしく、型崩れしにくいいため、細く切ったり、煮込んだりと多様な調理法に耐えることができ、二百種類以上の料理があるそうです。

263年8月、魏は全軍をあげて蜀に侵攻します。孔明亡き後、蜀を担った大將軍・姜維は、漢中で魏軍の鍾会・鄧艾に敗れた後、閬中から剣門関へと退き籠城します。この時、姜維の軍勢は疲弊して戦うことができ

### 蜀道難「明月峽古棧道」

蜀の棧道と聞いてまず思い浮かぶのは、断崖を穿って造られた「明月峽古棧道」でしょう。現在の広元市朝天鎮にあり、ここを流れる嘉陵江に沿って造られました。古来より漢中から蜀に入る重要な道であり、全長4キロにわたる棧道は春秋戦国時代から掘り始められました。三国時代、劉備軍が蜀に進軍する際に駐屯していた場所として知られており、また、諸葛孔明の北伐ルートでもあります。北伐の際には、ここを通過して定軍山や五丈原に物資が輸送されました。唐の時代には、玄宗皇帝が安史の乱によって洛陽を追われ蜀へと南遷した際、ここで元日の朝拜が執り行われたとされています。

明月峽の棧道は、そのまま崖をえぐって道を作ったものと、崖に穴を掘り杭を刺し、そこに板を並べたものがあります。かつて数百キロも続いたこの棧道も、風化とダム建設によって多くが破壊されてしまいました。残された当時の杭穴を用い、かつての棧道の姿が復元されています。

右ページ右下／山に囲まれた要害の地「剣門関」 右ページ中左／剣門関名物の豆腐 右ページ中右／旧道を彩る山桜(3月) 右ページ左下／地元の人々の生活を垣間見る(昭化鎮) 左ページ中上／明月峽古棧道。上部に見えるのが断崖をえぐった道、下に見えるのが復元された木棧道

ず、軍馬も人を乗せることができぬほどやつれ、蜀の北の障壁である剣門関は危機に瀕していました。そこで、ひとりの地方官が姜維に進言しました。「関所を閉ざし、3日間は戦いをせず、住民たちに各家で大豆を絞って豆腐を作らせましょう。それを兵士に与え、軍馬にはおからを食べさせ、両者の体力が回復してから戦うのです」。この方法が功を奏し、兵士と馬の体力はすぐに回復しました。3日後、姜維はわずから五千の軍勢を率いて関所を攻め下り、鍾会を破って、魏軍の陣地を数十里後退させました。そして、実に3ヶ月間にわたって剣門関を死守したのです。

